

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 山本 圭

論 文 題 目

エ ル ネ ス ト ・ ラ ク ラ ウ の 政 治 思 想
—— 敵 対 性 ・ 不 審 者 ・ デ モ ク ラ シ ー ——

論文審査担当者

主 査	名古屋大学	准教授	布施 哲
委 員	名古屋大学	教 授	飯野和夫
委 員	名古屋大学	教 授	藤井たぎる
委 員	名古屋大学	准教授	大屋雄裕
委 員	九州大学	准教授	大賀哲

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本の政治学者、思想史研究者たちのあいだでこれまで十分に検討されてきたとは言い難いエルネスト・ラクラウの政治思想の全体像を明らかにするとともに、それを通じて、申請者、山本圭氏が「不審者のデモクラシー」と呼ぶ、現代民主主義論の新たな展望を開くことを試みるものである。

本論文は二部構成を採っている。第一部「エルネスト・ラウラウのポスト・マルクス主義」においては、ラクラウの政治思想ならびにその理論的要諦の全面的な再検討が試みられている。第一章「ポスト・マルクス主義の方法論」では、シャンタル・ムフとの共著である『ヘゲモニーと社会主義戦略』を中心に、ラクラウが打ち出したポスト・マルクス主義の方法論が吟味される。ラクラウ＝ムフは、古典的マルクス主義が執拗に保持する経済、階級還元主義を克服すべく「言説 discourse」概念を導入したが、この概念は『ヘゲモニー』が上梓された当初、古典的マルクス主義者たちから主に「唯物論的分析の放棄」、もしくは「言説還元主義」のかどで苛烈な批判を浴びることとなった。本章ではその代表的な批判が例示されるとともに、それらに対すラクラウ＝ムフの応答が詳細に分析されている。そうした分析を通じ、山本氏はラクラウのポスト・マルクス主義の理論的な柱として「ポスト基礎付け主義 post-foundationalism」と「ラディカルな唯物論 radical materialism」を挙げる。山本氏によれば、これらは社会空間ならびに政治的アイデンティティを閉じようとするベクトルと、逆にそれを開こうとするベクトルを指しており、第一部の以下の章では、それら二つの柱に対応する仕方で議論が展開されることとなる。

第二章「政治と普遍的なるものの行方」では、ラクラウのポスト・マルクス主義を特徴づける二つのうち、「ポスト基礎付け主義」、つまりは社会空間を閉じようとするベクトルに対応する「普遍性」の問題が取り扱われる。今日、差異と多元主義の旗印のもと、個別主義的アイデンティティの自己主張が跋扈するなかで、普遍主義という観念は、ともすれば全体主義的イデオロギーに墮するものとして忌避される傾向にある。しかし山本氏は、ラクラウが政治を復権させるために普遍性を再構築することこそが不可欠であるという明確な立場を打ち出していることに止目し、そこから、今日いかなる普遍性の概念が、そして普遍主義と個別主義のどのような関係性が可能であるかを考察している。

第三章「敵対性 antagonism と異質性 heterogeneity」は、ラクラウのポスト・マルクス主義の第二の特徴、社会空間を開くベクトルである「ラディカルな唯物論」に対応した分析がなされている。本章がまず分析の俎上に載せるのは、ラクラウの政治理論において枢要な位置を占める「敵対性」の概念である。敵対性はラクラウの政治理論において一貫して

論文審査の結果の要旨

重要な比重が与えられているが、その提示の仕方が著作や論文ごとに必ずしも一様ではないことが明らかにされている。本章ではこの敵対性概念の変遷が追跡されるとともに、さらにはそれが「異質性」といういまひとつの重要概念と交差する過程が分析される。「異質性」はラクラウが「ラディカルな外部 radical exteriority」と呼ぶものの等価物であり、これをラクラウは社会空間の最終的な縫合を不可能にするものとして提示しているのだ、と山本氏は解釈する。

このように、第一部で山本氏は、「社会は存在しない」というラクラウのよく知られたテーゼの背後にある理論的骨子を、主な著作や論文、それらに対する批判、さらにそうした批判に対する諸々の(再)応答を丹念に追うことで、結果的に、いわゆる「西欧マルクス主義」の思想史的系譜におけるラクラウの特異性をも浮き立たせている。

第二部「不審者のデモクラシー」では、第一部で明らかにされたラクラウのポスト・マルクス主義から導かれるラディカル・デモクラシー論が検討対象となる。第四章「現代民主主義におけるアゴニズムの隘路」では、そのための予備作業として、現代民主主義理論、なかでもラクラウのデモクラシー論としばしば混同されている「闘技的民主主義 agonistic democracy」が採り上げられている。本章は、闘技的民主主義を唱える代表的な論者であるハンナ・アレント、ウィリアム・ユノリー、そしてかつての共著者であるムフを分析することで、その理論的潮流内部での共通点と差異を浮かび上がらせるが、同時にこの理論が抱える限界も明らかにしている。

第五章「不審者のモンタージュ」では、山本氏が「不審者」と呼ぶ新しい政治的アイデンティティが議論される。まずマルクスの古典的著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を手掛かりに、社会から排除されたものが、いかにして同質的な空間に介入する政治勢力になりうるのかが検討される。しかし、しばしば「後期近代」とも呼ばれる時代にあっては、異質性は単に外部のそれとは見なされない。続いてなされる「アンダークラス論」や「社会的排除論」の分析を経由しつつ、山本氏は、包摂/排除の語りが前提とするような外部/内部のメタファーが十分に機能していない現代の政治的アイデンティティの諸相を提示する。ここから明らかになるのは、異質性は外部に放擲された特定のアイデンティティというよりは、むしろアイデンティティの不安定性や欠如として、アイデンティティそのものに内在的であるということである。この不安で不安定なアイデンティティを生きることを強られる「われわれ」こそ、山本氏が「不審者」と呼ぶものであり、ラディカル・デモクラシー論はまさに、そのようなアイデンティティを政治的主体として再定義するものであるとされる。

論文審査の結果の要旨

第六章「不審者のデモクラシー——新しい動員にむけて」では、ラクラウのデモクラシー論を、より広範な人々の動員を可能にする理論として錬磨することが企図される。本章では主に、現代の代表的な政治理論としてリベラル・ナショナリズム論とマルチチュード論が検討されるが、山本氏は、これらはいずれも、自律的、能動的にして自己啓蒙的な“強い主体”を前提とする「肯定性の理論」であると断じている。それに対して「否定性の理論」として提示されるのがラクラウのポピュリズム論であり、これこそ今日の政治的アイデンティティ状況において、とりわけ現代民主主義にとって、理論的にも実践的にも重要なものである、と山本氏は主張する。本章ではラクラウのポピュリズム論をより洗練させるかたちで「不審者のデモクラシー」の輪郭が浮き彫りにされるが、それは、ポピュリズム状況においてこそ開示されてしまう否定的アソシエーションの別名であり、山本氏はそうしたアソシエーションを、まさにラクラウがそうしたように、新たな民主主義理論のための主成分として再構成しようとしている。否定的アソシエーションは、内部そのものにある欠如から一定の自己同一化作用を通じて、新しい節合関係、代表関係、そして敵対関係を紡ぎだすものであり、同時に「不審者」たちによる新しい連帯の可能性を指し示すものである、というテーゼがここで提出される。

終章では、まずラディカル・デモクラシー論の最後のアポリアが考察される。そのアポリアとはすなわち、本質主義の陥穽からポスト・マルクス主義を、ひいてはヘゲモニー闘争の可能性を解放したものが「社会が偶発性 contingency に貫かれている」とする認識であったとすれば、そうした認識によって導かれる政治的解が“民主主義”である保証はどこにもない、というものである。いかなる規範性も倫理性をも排し、「敵対性」と「偶発性」を基軸とする政治思想ならびに政治理論が、なおも「デモクラシー」を標榜する根拠は何なのか。つまりここで提出されているのは、ラクラウ理論がデモクラシー論でありえるのはなぜか、という率直な問いである。これに対する応答として、ヘゲモニー論とデモクラシー論を架橋すべく山本氏が次に前面に出したのは、「戦略」という概念である。「戦略」はラクラウにあっても十分に深められてはいない概念だが、ここではクラウゼヴィッツ、モルトケ、グラムシなどが理論的補助線として参照されつつ、ラクラウの理論的構えが“デモクラシーの(ための)理論”たりえる根拠が辛うじて提示されている。

ただし、「終章」での展開が完全に成功しているとは言い難いのも事実だ。もとより「完全な成功」は、それ自体が別の理論的「基礎付け主義」へと後退してしまうことを意味する以上、それをラクラウ理論から論理必然的なかたちで抽出することは望むべくもないものではある。しかし、本研究ではラクラウ自身がそれに寄り添ってきた古典的マルクス主

論文審査の結果の要旨

義の文脈が割愛されており、したがってマルクス主義の歴史のなかで幾度も登場してきたはずの「戦略論」がほぼ等閑視されているため、「終章」での論理的飛躍は、“斬新さ”の印象よりはむしろ唐突感を与えてしまいがちである。さらには、ラクラウのいまひとつの大きな理論的バックボーンであるソシール言語学、フレーゲ論理学、そしてフロイト＝ラカンの精神分析学もやはり議論の埒外に置かれているため、概念的な分節化が中途半端となっていることも、本研究全体にかかわる問題点として挙げられるだろう。

とはいえ、上記問題点はいずれもそれ自体が質、量ともに独立した研究として考察されなければならない大テーマであり、山本氏の研究が主に現代民主主義理論と対照した際のラクラウ理論の位置づけに焦点を絞ったものであることを考え合わせれば、学問的には許容範囲に収まるものである。先述のように、日本では「ラディカル・デモクラシー」という標語のみが浮遊し、その唱道者であるラクラウ本人の理論は、その難解さゆえに放置されてきた感がある。山本氏の研究はそうした状況に“一石を投じる”以上の明晰さと緻密さでもって学問的介入をおこなっている。このことはそれ自体が十分に意義深いものであるが、さらに、「終章」に見られるラクラウ理論の難問に正面から挑んでいることもまた、本研究に関して評価されるべき点であるだろう。

こうした理由から、今後の研究課題を指摘しつつも、審査員一同は、本論文が博士号の学位を授与するに値するものであると判断した。